

IOGが2022年度に行ったフレイル予防および高齢社会におけるヘルスについての政策提言・共同声明をご紹介します。

フレイル予防ポピュレーションアプローチに関する声明と提言…………… 32

G7 サミット2023：Gサイエンスアカデミーからの共同声明…………… 34



フレイル予防ポピュレーションアプローチに関する声明と提言

文責：飯島 勝矢（東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター 教授）

<フレイル予防啓発に関する有識者委員会より（2022年12月）>

超高齢・人口減少社会を迎えている今、医療や介護の分野での限りある公的資源も念頭に置き取り組まねばならないのは、高齢期においてできる限り心身の自立の維持を目指すことである。そのためには、近年提唱された新たな概念「フレイル」を十分に理解し、産官学民連携のまちづくりの中で、フレイル予防・フレイル対策を具体的に実践していくことが鍵になる。

フレイル予防啓発に関する有識者委員会は、フレイルの概念及びその特徴と構造を確認したうえで、ポピュレーションアプローチに主眼を置いたフレイル予防の体系的かつ統一的な声明を科学的根拠に基づきまとめるとともに、産官学民一体となって科学的根拠を踏まえたフレイル予防のポピュレーションアプローチに取り組むべきとの提言を行うものである。そして本提言が、行政や産業界をはじめ、幅広くフレイル予防のポピュレーションアプローチに取り組む担当者にも周知されることを期待する。

(<https://www.ihep.jp/frail-yobo/> から引用)

以上を踏まえ、この声明と提言に対する種の読み手として、行政や産業界を中心に、幅広くフレイル予防のポピュレーションアプローチに取り組む担当者にも目を通して頂けるように、有識者委員会を編成し、その委員の中に飯島勝矢も入り、作成した。

【概要】

○フレイルの概念・特徴と構造

- ・フレイル（虚弱）とは、加齢により体力や気力が弱まっている状態
- ・日常生活活動や自立度の低下を経て、要介護の状態に陥っていく
- ・健康と要介護の中間の時期であり、複数の要因によって負の連鎖に陥りやすい状態（特に社会参加の低下も早期の段階から大きな影響を及ぼす）
- ・しかし、適切な介入や日常生活の工夫により機能を戻せる時期（可逆性）

○フレイル予防のポピュレーションアプローチ（集団を対象とする啓発や環境整備）の重要性

- ・2040年には、85歳以上人口1000万人になっていく。ハイリスクアプローチ（フレイルになってしまった個々の人への専門職による対応）だけでは不十分

○ポピュレーションアプローチとしての啓発における標準的な行動指針

- ・「栄養（食事・口腔機能）」「身体活動（運動を含む）」「社会参加（社会活動）」この三本柱を意識した日常生活の工夫が重要（1つより2つ、2つより3つの方がより大きな効果をもつ）

○フレイル予防のポピュレーションアプローチの展開手法

- ☆ 地域住民の自助互助を基本におきつつ、行政、産業界・教育界など産官学民一体的な対応
- ☆ 一次予防（住民への啓発）とゼロ次予防（自然に予防できるような環境の整備）の組み合わせが重要。この場合、フレイル予防の特性に留意した新たな手法の開発が重要
- ・フレイルの認知度の普及を推進
 - 標語の設定や条例の制定提案「栄養（食事・口腔機能）」「身体活動（運動を含む）」「社会参加（社会活動）」の三本柱でフレイル予防
- ・質問や計測による地域住民の「気づき」による行動変容が重要
- ・住民の「自助・互助」、特に互助が重要、側面協力という行政の支援も重要
- ・行政と連携した産業の役割が大きい
 - 産業による啓発活動 → 国のヘルスケアサービス振興策に沿ったフレイル予防のビジネスモデルの展開を期待
 - フレイル予防を起点とする情報システムの開発も期待
- ・超高齢化・人口減少の先行地域でのフレイル予防の課題からまちづくりへの展開の動きは、全国に向けての貴重な参考。その手法の開発に期待
- ・ゼロ次予防として、フレイル予防に適した食品の開発、歩きやすいウォーカブルな環境、通いの場等の様々な対応が重要
- ・高齢者の就労は、フレイル予防につながる一方、好ましい就労の在り方にも留意が必要

- フレイル予防のポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチの連携
- フレイル予防に関するデータの解析やポピュレーションアプローチの効果の計測などの調査研究の重要性



詳しくはこちらから <http://www.ihep.jp/flail-yobo/>

【提言】 幅広い関係者によるフレイル予防国民啓発活動への提言

1. フレイル予防のポピュレーションアプローチは大きな可能性を持っている
2. 超高齢・人口減少社会において、今なすべきことの一つは、
国を挙げたフレイル予防のポピュレーションアプローチである
3. フレイル予防国民啓発会議（仮称）の設置を求める



フレイル予防啓発に関する有識者委員会委員等名簿（50音順 敬称略）

- [委員] 秋下 雅弘（東京大学大学院医学系研究科老年病学 教授）
 荒井 秀典（国立長寿医療研究センター 理事長）
 飯島 勝矢（東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター 教授）
 岡本 茂雄（国立研究開発法人産業技術総合研究所・人間拡張研究センター 招聘研究員）
 葛谷 雅文（名古屋鉄道健康保険組合 名鉄病院 病院長、名古屋大学 名誉教授）・・・委員長
 久野 譜也（筑波大学人間総合科学学術院 教授）
 後藤 励（慶応義塾大学大学院経営管理研究科 教授）
 近藤 克則（千葉大学予防医学センター 教授、国立長寿医療研究センター 老年学評価研究部長）
 藤原 佳典（東京都健康長寿医療センター 研究部長・東京都介護予防・フレイル予防推進支援センター長）
 島田 裕之（国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター センター長）
 下方 浩史（名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科 教授）
 中島 滋（文教大学 学長）
 野口 緑（大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座 特任准教授）
 服部 真治（医療経済研究機構政策推進部 副部長）
 平野 浩彦（東京都健康長寿医療センター 歯科口腔外科部長）
 松原 由美（早稲田大学人間科学学術院 教授）
 宮地 元彦（早稲田大学スポーツ科学学術院 教授）
 矢島 鉄也（日本健康・栄養食品協会 理事長）

- [特別顧問] 大内 耐義（国家公務員共済組合連合会 虎の門病院 顧問、公益財団法人冲中記念成人病研究所 代表理事）
 鈴木 隆雄（桜美林大学大学院 特任教授、国立長寿医療研究センター 理事長特任補佐）

G7 サミット 2023 : G サイエンスアカデミーからの共同声明

文責：飯島 勝矢（東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター 教授）

G7 サミット 2023 : G サイエンスアカデミーにおいて、以下の3つの大テーマが設定された。

テーマ①：気候変化に伴うシステミックリスクに対応する分野横断的意思決定を支える科学技術

テーマ②：高齢化社会におけるヘルス

テーマ③：海洋と生物多様性

この中で、「テーマ②：高齢化社会におけるヘルス」の共同声明を以下のメンバーで執筆した。

- ・和氣 純子 東京都立大学大学院人文科学研究科教授
- ・荒井 秀典 国立研究開発法人国立長寿医療 研究センター理事長
- ・飯島 勝矢 東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター 教授
- ・郡山 千早 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授
- ・山田 あすか 東京電機大学未来科学部建築学科教授

【概要】

<現状・課題>

- ・世界的に高齢化が急速に進む中、COVID-19 によるパンデミックは、高齢者の感染に対する脆弱性に加え、感染抑制を目指した政策に伴う身体的・社会的活動の制限によるフレイル進行や社会的孤立等、高齢化社会における課題を再認識させた。
- ・高齢期を含めあらゆるライフステージを生きる人々が社会との関係を持ち続けることができる社会システムを整備し、個人と社会にとって包摂的な意味での Well-being を実現することが必要。

<具体的な提言事項>

- ・ テーラーメイド型の疾病・フレイル予防と疾病重症化・介護予防を含む包括的医療介護システム構築（認知症・生活機能低下に対応した医療介護システムの構築、パンデミックに対応した体制の構築 等）
- ・ 社会的孤立ゼロを目指した、ケアと融合した包摂的コミュニティの創出（「社会的処方」の実践、フォーマルケアとインフォーマルケアが融合した拠点の確保、継続居住と教育・医療のケアの両立 等）
- ・ デジタル技術、ロボット等を活用した高齢者の移動支援と主体的社会参加を促す社会システムの構築（デジタル技術活用における高齢者の権利とニーズへの配慮、スマートハウスの開発、MaaSの促進、国際的な官民学協力等）
- ・ ケア従事者の社会経済的地位の向上と技術革新によるケアの効率化（ケア従事者の地位向上・安定的確保、家族ケアの負担の実態把握、多様な担い手が主体的に参加できる社会の構築 等）



Gサイエンス学術会議 2023

<https://www.scj.go.jp/ja/int/g8/index.html> より引用

(2) 基調講演・パネルディスカッション - Session 2: ヘルス

冒頭、郡山千早Gサイエンス学術会議 2023「ヘルス」執筆対応小分科会副委員長より、共同声明を説明した後、アラン・フィッシャーフランス科学アカデミー会長、マリア・クリスティーナ・マルクツツォイタリア・リンチェイ国立アカデミー国際担当役員による基調講演が行われた。

続いて、フィッシャー会長、マルクツツォ役員、飯島勝矢委員、和氣純子委員をパネリスト、郡山副委員長をモデレーターとしてパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションでは、ケアサービスの提供に係るインセンティブ、高齢者の尊重と社会的に平等なケア負担、柔軟・持続可能な社会保障制度の構築、若年層の活躍の場の確保などについて発言があった。

